俳句で感じる豊かな暮らし、美しいふるさと、子どもたちの成長――

内子町小・中学生俳句大会の最優秀賞を紹介

「第７回内子町小・中学生俳句大会」の表彰式が12月18日、共生館で行われました。
町内の全ての小・中学校から1,022点の応募があり、その中から最優秀賞８句、優秀賞46句、入選20句が選ばれました。式では選者を務めた町内俳句会の代表者や教員、夏井いつきさんの講評が述べられました。
ここでは最優秀賞に輝いた子どもたちの俳句と、選句者の講評を紹介します。

◆夏井いつき選

夏井先生の講評

ひまわりをよこめにぼくらだいぼうけん

内子小１年　片桐大河（たいが）さん

ひらがなの「だいぼうけん」からは、低学年の子どもたちの笑顔が見えてきそうです。走り抜ける「ぼくら」を、ひまわりが見守りながら笑っているようです。楽しそうな大冒険の声が響いています。

金魚ばちみなもにうつるねこの舌

内子小４年　石岡花菜（かな）さん

丸い金魚鉢がレンズとなって、恐ろしい猫の舌がさらに拡大されて大写しのようにみせています。リアルな舌の描写によって、猫に見つめられている金魚になったような気分になりました。

わり算のプリントに落ちる汗の音

五十崎小５年　東　寛大（かんた）さん

夏休みの宿題でしょうか。集中して必死に解いている顔が見えるようです。汗がプリントに「ぽたり」と落ちる瞬間の音。かすかな音が聞こえたような気がするのも、進まない焦りからかもしれませんね。

軽トラの荷台で読書秋の風

大瀬中１年　谷岡向日葵（ひまり）さん

作業が終わるのを待っているのでしょうか。それとも、休日の軽トラの荷台を占領しているのでしょうか。澄んだ秋の空が広がり、さわやかな風が吹きすぎる中、すがすがしく読書の秋を満喫しています。

◆内子町教育委員会選

選句者の講評

いきとめていちにのさんでばったとる

内子小１年　川本悠乃（はるの）さん

バッタをドキドキしながら捕まえようとしている様子が、まるでその場にいるように伝わってきました。網を持って、そーっと息をとめて近づいているのでしょう。低学年らしいかわいい俳句です。

泳ぐ泳ぐプールの底のぼくのかげ

内子小３年　本田涼太（りょうた）さん

クロールで泳いでいるのでしょうか。プールの底に目をやった時、ひとかきひとかき泳ぐ自分の姿が見えたのです。泳ぐ泳ぐとリフレインにしたことで、リズムよく楽しく泳いでいる様子が伝わります。

ボクの空キミの空にもイワシ雲

内子小６年　宇都宮律巳（りつき）さん

この句には楽しいとか、悲しいとかいった感情を表す言葉が入っていませんが、「イワシ雲」で情緒いっぱいになりました。今、二人で見上げたイワシ雲を、大人になった別々の空で思い出すことでしょう。

スパイクにひもを通せば雲の峰

五十崎中３年　西宮莉杏（りあん）さん

「雲の峰」は入道雲を山の峰に見立てています。これからあるのは練習か試合か。ひもを通しながら気合を入れて空を見上げると入道雲。「さあっ、いくぞ」と声まで聞こえそうな臨場感のある句になりました。